

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590300200		
法人名	社会福祉法人三ツ葉会		
事業所名	楓荘グループホーム 牧の家	ユニット名	あおぞらユニット
所在地	宮崎県延岡市牧町4651番地		
自己評価作成日	平成29年10月4日	評価結果市町村受理日	平成29年12月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kajigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action=kouhyou_detail_2017_022_kihon=true&JigyosyoCd=4590300200-00&PrefCd=45&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	平成29年10月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域密着型の施設として、地区の行事への参加を続けている。職員だけの参加ではなく、入居者も一緒に参加している。今年度も、地区の清掃作業には作業可能な入居者6名、職員4名で参加。地区の運動会には全入居者18名で参加させていただきました。地域の方々のご理解、ご協力の下、今後も続けていきたいと思っております。今年度は初年度に実施していたが、中止となっていた、地域の小学生に対しての施設の開放、交流を再開する事ができました。小学校への説明後、許可を得て、全ご家庭に案内文書を送り、施設を利用する生徒は保護者の承諾を得てから来ることを条件とさせていただきます。多目的ルーム、カラオケ、パブリックスペースでの卓球等、夏休み期間中は合計約230人の生徒さん達の利用があり、日々、子供たちの元気な声があり、入居者も喜んでいました。夏休み後には再度全ご家庭に利用報告書を配ってもらい、今も継続して利用してもらっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近隣の小学校や中学校との交流も盛んで、日常的な訪問がある。夏休み期間の地域交流スペースを利用した遊びの中では利用者の参加も自由で、自然と生活の中に子どもたちのいる環境が生まれている。これを継続させるため、学校へ訪問後の様子や人数の報告、ルールづくり、家庭への説明チラシの配布などの取組にも力を入れている。他にも子どもクラブチームのミーティングや民生委員・児童委員の会議にも利用され、地域の方が訪問する機会が増えている。また、利用者の生活よりも、決められた業務時間や内容を消化することに職員が追われることのないよう、毎日の業務は緩やかで、何をしたいのか、今何が一番必要か利用者主体に考えて支援するよう努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設理念である その行為は利用者の為になるのか、 その行為は地域の為になるのか、 その行為は職員の為になるのか、 を常に考え、実践している。	毎日の業務の中でも利用者のためだったかと、自問したり他の職員から問いかけられたりすることが多い。疑問に思う行動があれば、今行われたことが誰のためか、話し合うように努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい	地域の清掃活動、運動会等に入居者、職員とで参加し、地域の方々と顔見知りの関係になり、挨拶等も積極的に交わしている。	「まずは挨拶から」を職員全員が自覚し、散歩や買い物の際には地域の方々と交流している。今後は地域からグループホームに来訪できる行事などを計画している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に開放し、散歩時等には積極的にこちらから声掛けをしている。また、小学生の来設時には、入居者と関わる機会もあるので、その際には認知症についての話をしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、会義の場で、プロジェクターを使い、活動内容を写真で振り返りながら報告する事で、伝わり易いよう、工夫をしている。参加者には必ず意見をもらい、参考にしていく。	活動内容の映写は参加者の視覚に訴えるため、文章で報告されるよりも理解しやすく、意見も出やすい。活発な意見交換がなされ、出された意見は素早く反映し、次の機会に結果を伝えている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者とも報告の際など、コミュニケーションを大切に、情報交換がしやすい関係作りを心掛けている。	管理者が窓口になっているが、わからないことやケースの相談などは気軽に話ができる関係を築いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束ゼロを目指し、家族からの要望があった場合にも、しっかりと説明し、理解していただけるケアの方法を伝え、実践している。	安全のための拘束であっても、身体拘束はできないことを家族にも十分説明し、理解につながるよう取り組んでいる。玄関は施錠しているが、職員が同行し自由に外出できるよう支援している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間での意識向上の為、法人内での勉強会を実施し、常に意識した対応をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内での勉強会の場や必要時に応じ、関係機関に問い合わせ等の対応をとっている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	必要時には必ず事前に文書等で説明し、不明な点や詳細は十分に説明してから対応する。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	管理者がいる時の面会は必ず家族と会話をする時間を作れるよう、職員間で声掛けをしている。また、職員も話す機会が持てるよう、面会時の送迎時は必ず玄関まで見送る。		家族との会話に努めているが、自室や共用空間に限らず、帰る時には玄関を出てから話す言葉や、車に乗ってから最後につぶやく意見も、取り上げられるよう、注意深く対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	開設時から取り組んでいる振り返りノートを活用し、職員個人個人の意見にも配慮できるようにしている。また、ソーシャルネットワーキングサービス等の活用も積極的にしている。		3つ以上発表を用意しなければならない会議だけでなく、毎日提出する「振り返りノート」には、質問や気づき、提案などを書くようにし、意見を取り上げる工夫をしている。管理者は毎日コメントを返すよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	行事の企画や実践を職員に任せ、実行する事で、やらされ仕事ではない環境作りを心掛けている。基本的には定時での労働ができる業務内容の検討をし、必要に応じ、時間外等、しっかりと対応している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部での研修参加は出張として取り扱い、積極的に参加してもらうことで、スキルアップを目指してもらっている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内の他の事業所との勉強会、交流会を定期的実施し、現場の職員にも参加してもらっている。お互いの施設訪問等も気軽にできる環境作りを進めている。			

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前にご家族等から情報を得るが、一番は本人に寄り添うことで得た情報を職員、家族で共有し、信頼を得られるような対応をやっていく。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを利用する事で、本人、ご家族との良い距離感ができることで、より良い関係性を築いていけるよう、情報を共有し、関係作りにも努める。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の状態を一つ一つ把握し、過剰に手を出すことの無いように、本人の気の向くままに動ける環境作りをする。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人を年長者として敬意を持った対応をし、その中でできた関係性を基に、一緒に生活していく。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族への情報提供を密にし、家族との情報共有を大切にすることで、家族対応での受診や外出への援助をしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	かかりつけ医や散髪も在宅時から継続して行っている方が殆どである。また、地区の行事に参加したり、友人の面会時にはゆっくりと過ごしてもらえるよう、場所等の提供をしている。	家族や本人からの情報を集めながら、昔行っていた花見の場所を行事会場にしたり、スーパーで知人と会う機会のある方には、散歩のついでに買い物をするなど、関係が途切れないよう努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	開設時より、あまり入居者の入れ替わりがないこともあり、9人のコミュニティーができています。お互いの体調を心配したり、声かけもされている様子。			

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や事業所の転居があって退居されたケースでも、その後も同法人内の特養へ繋がるような連携、情報共有、または、他事業所での生活の様子を家族、事業所から聞くようにしている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	帰宅願望が強い方には外出に付き添ったり、できる限り本人の思いに沿えるよう、対応している。	毎日の業務に追われないため、利用者と過ごす時間が多い。話をしたり一緒に行動しながら、何が好きか、どう感じているかなど理解するよう努め、寄り添うようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一つ一つの症状、行動を記録に残し、情報共有をすることで、ケアの参考にしていく。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員同士で情報を共有し、調理や洗濯物たたみ、掃除等もできることはしてもらうように支援している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態に合わせ、必要に応じ、職員、家族とで情報共有を図り、話し合っ、今できることを大切に実行している。	ケアマネジャー以外の現場の職員全員でモニタリングを行っている。パソコンに情報を入力することで各利用者の介護計画を確認し、その変化や状態を理解することにつなげている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は貴重な情報として残し、出勤時には必ず記録に目を通してから勤務に入ること、情報を活かしたケアを実践している。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	遠方の家族が受診対応が困難な場合は自費サービスのヘルパー事業所と連携したり、必要に応じ、2ユニット間のスタッフを流動的に配置し、入居者の状況に合わせた対応をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地区の行事の運動会や奉仕作業にも入居者、職員とで参加している。また、地域の小学校に同意を得て、小学生に施設内を開放し、色々な遊びや入居者との交流を図っている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は入居前のかかりつけ医にご家族対応で受診している。受診毎に受診シートを作成し、日常の様子、受診に必要な情報を記載し、家族に説明した上で、医療機関に持参して受診してもらっている。	基本的には家族受診で、遠方の方には有料ヘルパーを利用する家族もある。日頃の様子などは詳しく記載して、受診に役立てるように取り組んでいる。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日頃からバイタル測定を一日に二回以上実施し、普段と違う点があれば、すぐにご家族に報告し、医療機関への受診につなげ、早期対応に心がけている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には介護サマリーを作成し、医療機関の相談員等との情報交換、共有に努めている。入院中も連絡を取り合い、退院時には事前に面会に行き、必要な情報を病棟看護師、相談員から得ることで、退院後の生活へ繋げている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態変化に応じ、医療的な処置が必要な状態になった際には、医療機関や医療的処置ができる介護事業所との連絡を密にし、ご家族の希望もふまえながら、現状の対応に適した事業所への転居、転院をすすめている。	重度化した場合は、基本的に医療機関への入転院を勧めていたが、それを望まない家族もあった。そのことを踏まえ、家族と十分に話し合い、方針を考え、希望に沿えるよう努めている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のマニュアルを基に、早期対応ができるよう、常に準備をしている。また、実際に遭遇した場合には、不備があったもの等は早急に改善し、周知している。また、救急法の実習は年に1回、実施している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に施設内で火災、地震、夜間等を想定した避難、防災訓練を実施している。地区の避難誘導訓練にも参加している。また、非常食等の備蓄もしており、担当者が管理している。	災害の種類や避難方法など、様々な状況を想定して訓練を行っている。近々消防署を含めた避難訓練を計画している。また、地域の方に参加を呼び掛けた訓練も検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	挨拶や言葉遣い等、人生の先輩である入居者に対して失礼のない対応を心がけている。しかし、時折、言葉遣い等の乱れがある場合にはその都度、指導をしている。	利用者一人ひとりの個性も大切にしながら、誇りを傷つけない支援に努めている。不適切な言動があった場合は、まず自分に置き換えて考えてみるよう、促している。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望に沿えるよう、情報の共有をし、個別でも対応ができる環境を作り、本人の活動し易い対応をしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今できることを大切に、時間がかかっても支援があればできることはしてもらっている。また、行事等にも本人の意向に沿って無理強いはしない。業務優先ではなく、利用者優先を心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日頃からお化粧をされる方もいますが、重ね着等判断が難しい場合には声かけで本人の好み、季節感等に配慮した声掛けをしている。また、髪やひげについてはその都度、対応している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食時を中心に、調理の下準備から一緒に関わってもらい、食事前の準備、後片付けにも一緒に参加してもらっている。また、毎日の買出しにも一緒に出かけ、気分転換を図っている。	女性は調理などに参加しやすいが、男性利用者にも買い物の荷物持ちなどの役割を担ってもらい、食事づくりに参加できるよう工夫している。嫌いなものがある利用者には、代替のものを用意している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量にバラつきがある方は記録に残し、状況に応じて、摂取し易い食材、形態にして提供し、必要時には栄養補助食品や高カロリージュース、分食で対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを実施し、状態に応じて介助や義歯洗浄剤の使用にて清潔に心がけている。			

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄感覚、表情、行動に注意し、トイレ誘導を実施している。できる限り、必要最低限の排泄用品の検討をし、安易にオムツ対応にならない様、誘導方法等も話し合いながら実施している。	居室にトイレと洗面所があるため、個別の対応や誘導がしやすい。拒否があった場合は、担当職員や声掛けを変えながら、自立支援に向けて取り組んでいる。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤の調整だけでなく、水分補給、運動を日頃から心がけ、乳製品、果物、野菜等も食事の際に取り入れていくようにしている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日を固定せずに、できる限り希望に沿えるようにしている。毎日入る方や、活動により汗をかいた方など、すぐに対応できる環境づくりをしている。	曜日や時間帯は自由で、汗をかく行事や気候、個人の希望によって、自由に入浴ができるようにしている。日常業務がきっちりと決まっていないため、臨機応変に対応できるように努めている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間は良眠される方が多いが、早めに目が覚めた方や、眠れない方には職員が寄り添い、対応する。また、眠れなかった翌日等は、日中に休んでもらう等、無理のない対応をしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時には服薬マニュアルを遵守し、必ず二人での介助をする。薬の調整が必要と感じた際には受診時に情報シートに記載し、医者に相談する。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理、畑作業、裁縫、掃除等、今できることをやれる環境づくりを心がけ、実践している。また、施設内での行事等も現場職員が企画し、実践し、入居者、職員共に楽しみながら活動している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候に合わせて、近所の散歩やドライブにも出かけている。全入居者とマイクロバスで宮崎まで遠出したこともある。次回は大分を検討中。個別にもランチや道の駅へのドライブにも出かけている。	年間の行事としての外出だけでなく、利用者が思い立った突然の外出、散歩やピクニックなどにもできる限り対応している。食事の買出しの際に、自分の買い物に出かけるような支援も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	あおぞらユニット	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご本人で持っている方は、食材の買出しに同行した際に好きなものを買う楽しみもある様子。持っていない方も、一緒に食材選びや、ユニットの嗜好品等を購入する手伝いをしてもらっている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方の家族からの電話も子機を使って直ぐに本人と会話ができるよう取り継いでいる。また、はがき等も施設に郵送された分は本人に手渡している。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	定時での気温、湿度の確認をし、常に空調管理をしている。また、換気もしっかりと行い、空気の入れかえをしている。ロールスクリーンにて、日差しの調整も実施している。またくつろげる環境づくりにも気を遣い、必要以上に飾らないようにしている。	夜間落ち着かず、共用空間で就寝する利用者に合わせて、椅子をソファベッドに変更したり、その時の状況に合わせて心地よく過ごせる工夫をしている。多目的ホールは、地域交流の場として利用している。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	パブリック内のソファやテーブルを活用し、自由に過ごせる環境を作る。また、居室に一人での時間も確保できるよう配慮し、所在確認等で安全にも気をつけている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内のしつらえは、本人、ご家族で自由にしてもらい、昔なじみの物などを活用し、ゆっくり過ごせる配置にできている。	居室は自分の家だという考え方で、居室の掃除などは家族と一緒にしてもらい、鍵をかけるのも自由である(安全のため外から開錠可能)。ドアは普段から閉めてあり、自室として外と区別している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ベッドの高さ、周辺の商品の整理をし、本人が動きやすい導線を確保している。必要に応じて、離床センサーを設置し、安全に行動ができるよう、配慮している。			